

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04286

研究課題名(和文) 少年と高齢者の万引き予防策の実施・検証 社会的紐帯とローカルコードに着目して

研究課題名(英文) Making the plan to prevent from shoplifting of juveniles and aged citizens:  
Focusing on social bonds and the local code

研究代表者

久保田 真功 (KUBOTA, Makoto)

関西学院大学・教職教育研究センター・准教授

研究者番号：00401795

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、万引き被疑者および一般の少年を対象とした質問紙調査をもとに、万引きの規定要因を分析すること、以前に万引き防止対策として試行的に実施した、ボランティア活動の課題について検討すること、店舗の保安員などを対象としたインタビュー調査をもとに、万引き防止にあたり、ローカルな地域特有の問題があるのかどうかを検討することである。

分析の結果、初めて万引きをした者と万引きを繰り返す者とは、万引きを促す要因が異なること、普段からボランティア活動に参加している人ほど、参加頻度が高いこと、現在では、ローカルな地域特有の問題は見られなくなっていること、などが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is the following three. Firstly, to investigate the factors which affect shoplifting of juveniles and the factors which affect self-control of juveniles. Secondly, to examine the problems of volunteer activities to prevent from shoplifting. Thirdly, to investigate that there are the problems which are peculiar to the local area or not. The major findings are summarized as follows: (1) The factors which affect shoplifting of juveniles are different between the first shoplifters and the habitual shoplifters. (2) The people who usually participate in various kinds of volunteer activities tend to participate in volunteer activities to prevent from shoplifting. (3) Recent years, the problems which are peculiar to the local area tend to be limited.

研究分野：教育社会学

キーワード：万引き 非行 生徒指導 教育社会学

## 1. 研究開始当初の背景

万引きは「初発型非行(遊び型非行)」というカテゴリーの一部として扱われる経緯があったために、刑法犯少年に占める万引きの割合は高いものの、万引きを直接扱った研究は少なく、万引き経験者を対象とした調査研究となるとより一層少なくなる。加えて、少年の万引きに関する先行研究には、社会学を学問的基盤とした研究が少ない、少年の普通の学校生活に着目した研究がほとんど見られない、などの課題・問題点があった。

そこで、我々は以前に、Hirschi (1969) のボンド理論を理論的枠組みとするとともに、少年と学校との絆に着目した分析を行った。その結果、複数回補導された経験を持つ少年は初めて補導された少年と比べ、

家族に対する「愛着」が乏しいこと、仲の良い友人との関係の在り様が異なる可能性があること、進路について真剣に考えることや将来展望が乏しいこと、特別活動や部活動への取り組みが低調であること、学校の決まりを守るという自覚に乏しく、学校の決まりを守らない傾向にあることなどが明らかとなった(久保田・白松 2013 など)。

さらに、我々は、被疑者少年に加えて一般の中高生を対象とした質問紙調査を実施し、被疑者少年(中高生)と一般少年との比較も行った。その結果、先に示した傾向は、被疑者少年と一般少年との間でより一層顕著に見られること、また、被疑者少年は一般少年と比べ、進学の最終目標とする学校の段階が低いとともに、万引きがその後の進路に及ぼす影響を低く見積もる傾向にあることも明らかとなった(愛媛県警察・白松・久保田 2014)。

これらの結果は、学校と少年とをつなぐ絆が少年の万引きを防止する上で極めて重要であることを示唆している。その一方で、

我々の研究には依然として課題・問題が残されている。第1に、セルフコントロール(以下、「SC」)を組み込んだ分析を行う必要がある、ということである。ボンド理論の修正版とも言える Gottfredson & Hirschi (1990) の『犯罪に関する一般理論』(General Theory of Crime)では、SCという概念が着目されているが、我々の分析では、SCを分析に組み込んでいない。第2に、我々の分析結果は、ともすれば学校の役割を過度に強調することにもなりかねない、ということである。学校に課せられる役割が肥大化するなか、学校教育の力だけで問題に対処するのではなく、学校外の関連機関との連携による包括的生徒指導システムの構築を模索する必要がある。第3に、ローカルな視点を取り入れる必要がある、ということである。我々の研究のフィールドは、愛媛県というローカルな地域であるが、人口あたりの万引きの認知件数は全国的にみても極めて高い。このことは、ローカルな地域特有の問題があることを部分的に裏づけるとともに、そのことを踏まえた対策を講じることの必要性を示唆している。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、大別して次の3つである。第1に、万引き被疑者(20歳未満の少年および65歳以上の高齢者)および一般の少年を対象とした質問紙調査をもとに、万引きの規定要因に関する分析を行うことである。その際、すでに実施している調査を再分析するとともに、新たに一般の中学生を対象とした質問紙調査を行い、SCに着目した分析を行う。

第2に、以前に具体的な万引き防止対策として試行的に実施した「買い物をしながらできる見守り活動(以下、「見守り活動」)によって得られたデータを分析し、試行実

践の実施状況と課題について検討することである。

第3に、学校関係者や店舗の職員、万引きの監視を目的とする保安員（以下、万引きGメン）を対象としたインタビュー調査をもとに、万引き防止にあたり、ローカルな地域特有の問題があるのかどうかを検討することである。

### 3. 研究の方法

#### (1) 被疑者少年・被疑者高齢者調査と一般少年・一般高齢者調査

被疑者少年・被疑者高齢者調査については、愛媛県警察の協力のもと、2度実施した(第1回調査の実施時期は2011年10月～2012年2月末、第2回調査の実施時期は2012年8月～2013年2月末)。被疑者少年調査(20歳未満)の対象は90名であり、被疑者高齢者調査(65歳以上)の対象は、108名である。

一般少年・一般高齢者調査の調査対象は、愛媛県内の中高生976名および愛媛県内の高齢者437名である(調査の実施時期は2012年8月～2014年1月)。

加えて、一般少年調査の結果および『犯罪に関する一般理論』(Gottfredson & Hirschi 1990)においてSCという概念が重視されていることを踏まえ、あらたに愛媛県内の中学生を対象とした質問紙調査を実施した。調査対象は、2,070名である(調査の実施時期は2015年11月～12月)。

#### (2) 「見守り活動」に関する調査

「見守り活動」とは、ボランティアを募り、その方たちに買い物しながらスーパーの見回りをしてもらうことにより、万引き防止を企図した活動である(実施時期は2014年11月の1カ月程度)。ボランティアの方々は、地域のまちづくり活動や地域の見守り活動をしている地域の方(登録者

数34名)、店舗のある地区のPTAの保護者(登録者数21名)、大学生(登録者数19名)である。これらの方々の活動状況を調べるとともに、活動参加者数名に対してインタビュー調査を実施した。

#### (3) 学校関係者や店舗の職員、万引きGメンへの調査

小学校や中学校で生徒指導に長く関わっている先生、コンビニ経営者、万引きGメンへのヒアリングやインタビューを行った。

### 4. 研究成果

#### (1) 被疑者少年調査と一般少年調査の再分析結果

初めて万引きをした者と万引きを繰り返す者とは、万引きを促す要因は異なるのではないかと、という仮説のもと、分析を行った。その結果、次のようなことが明らかとなった。

友人との関係が良好である場合に、少年は初めての万引きに着手する傾向にある。ただし、友人との関係が初めての万引きを促すかどうかについては、友人の質によっても左右される可能性があることに留意する必要がある。

進路や将来に対する見通しを明確に持っている場合、学校の決まりを守るという自覚のもと、学校の決まりを守っている場合、部活動に積極的に取り組んでいる場合、家族との関係が良好である場合に、少年は万引きに着手しにくい傾向にある。

生活が厳しい状況にある場合、女性よりも男性の場合において、少年は万引きを繰り返す傾向にある。

教師と良好な関係にあり、教師に親しみを抱いている場合、万引きしたことを気にかけてくれる友人の存在を知覚している場合に、少年は万引きを繰り返さな

い傾向にある。

初めて万引きを行った者については、周囲から誘われて行うケースが多い一方で、万引きを繰り返す者については、「万引きは簡単である」という認識のもと万引きを行うケースが多い可能性がある。

#### (2) 一般少年調査(2015年調査)の結果

一般の中学生を対象に新たに実施した調査をもとに、SCの関連要因について検討した。中学生のSCを測定するための尺度(以下、「LOW SC スコア」)としては、Grasmick *et al.* (1993)を用いた。この尺度の得点が高いほど、SCが低いことを示す。まずは、SC尺度得点と逸脱行動得点との関連を検討した。その結果、LOW SC スコアの標準化得点(偏差値)が55を超えた場合に、逸脱行動得点が高まることが明らかとなった。

この結果を踏まえ、LOW SC スコアが55未満の者と55以上の者とで、家族や友人との関係、さらには学校生活に違いが見られるのかどうかについて検討した。とりわけ着目したのは学校生活である。Gottfredson & Hirschi (1990)は、家庭と比べて学校は子どもたちの社会化機関としてのいくつかの利点があることを指摘しているものの、SCと学校生活との関連に着目した研究は、国内外ともに少なかったからである。

分析を行った結果、次のようなことが明らかとなった。

家族との関係が良好である場合や、保護者が子どもを監視・監督している場合に、子どもたちのSCが高まる可能性がある。

子どもたちが学校の決まりに自覚的であり、それらを遵守している場合や、子どもたちが特別活動に積極的に取り組んでいる場合に、SCが高まる可能性がある。

る。

#### (3) 「見守り活動」に関する調査の結果

ボランティアの「見守り活動」への参加状況については、次のようなことが明らかとなった。

普段から店舗を利用している人の参加頻度が高く、「見守り活動」の説明会参加者およびコーディネータ担当者の参加率が高い。

ボランティアには2つの店舗で「見守り活動」に協力してもらったが、いずれの店舗についても5名程度の参加頻度が高く、半数程度が1、2回の参加にとどまっていた。

大学生および高齢者の場合、普段からボランティア活動に参加している人ほど、参加頻度が高かった。

#### (4) 学校関係者や店舗の職員、万引きGメンへの調査の結果

学校関係者や万引きGメンへのヒアリング・インタビューでは、万引きの「全件通報」が徹底される前には、警察よりも学校や家庭への連絡により、地域のつながりを元にした情緒的な解決が求められることもあったという。しかしながら、「全件通報」の徹底により、地域のつながりを元にした解決よりも、早急な通報と対応が重要となり、地域の紐帯がかえって万引きの通報をしにくくさせるというローカル・コードが弱くなっている可能性が明らかになった。店舗にとっては、「万引き」に伴う「ロス」は死活問題であり、アルバイトやパートによる「内引き」と「万引き」の両方の可能性が店舗のロス率を下げるポイントとなっていることなどが明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- (1) 久保田真功 2017, 「特別活動に期待される役割—いじめ・非行防止の観点から—」『初等教育資料』957,84-87頁(査読なし)。
- (2) 白松賢・久保田真功 2017, 「Factors Being Related to Self-control among Junior High School Students in Japan: Focusing on School Life of Students」『愛媛大学教育実践総合センター紀要』35,1-12頁(査読なし)。
- (3) 白松賢・久保田真功 2016, 「『学校・家庭・地域の社会的紐帯』による万引き抑止の可能性—試行モデル事業による課題探究—」『愛媛大学教育学部紀要』63,31-38頁(査読なし)。

〔学会発表〕(計3件)

- (1) 久保田真功 2017年10月21日, 「少年はなぜ万引きをするのか?—少年の万引き被疑者および一般の中高生を対象とした質問紙調査をもとに—」, 日本教育社会学会第69回大会, (於)一橋大学。
- (2) 久保田真功 2017年1月4日, “Factors Being Related to Self-control among Junior High School Students in Japan: Focusing on School Life of Students”, Hawaii International Conference on Education 2017, (於) Hilton Hawaiian Village Waikiki Beach Resort。
- (3) 久保田真功 2016年6月5日, 「子どもと地域との『つながり』や保護者の学校・地域との『つながり』は、子どもの学校生活にどのような影響を及ぼしているのか?」, 日本子ども社会学会第23回大会, (於)琉球大学。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：

権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保田 真功 (KUBOTA, Makoto)  
関西学院大学教職教育研究センター・准教授  
研究者番号：00401795

(2) 研究分担者

白松 賢 (SHIRAMATSU, Satoshi)  
愛媛大学・教育学部・教授  
研究者番号：10299331

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )